たるジ
になー
くなる
死ゲー

「心にもないことを言うと、あとで死にたくなるな」

　三条エマは言った。

　夏休みが明けて二週間経っていた。

　真昼の太陽は、この間までの勢いを失って惰性で輝いているだけのようだった。

　四階建てのこの屋上の何倍くらいあるのだろう。

　空のかなり高い所で、細かい雲がじんわり流れて行く。

「ねえ、由奈」

　エマは続ける。

「お世辞とか、建前とか、ジャパニーズレトリックとでもいうのかね、つまりそういう、口先舌先嘘八百っていうやつを言ってると、どんどんゲージがたまっていくんだな」

「ゲージ？」

「ヒットポイント、は減るものだから違うな。ダメージポイントだろうか？」

「死にたくなるの？」

「そうだよ。ゲージが満たされるほど、自分に失望して死にたくなるのさ」

　びしっと、エマは左手に持った箸でわたしの眉間を示した。
　彼女は左利きだ。

私が何も言わずにいると、エマは再び自分の弁当に向き合った。

「由奈、きみの好きな唐揚げをあげよう」

返事をする前に、わたしの弁当箱に大きいほうの唐揚げをさっと移した。

「ありがとう」

「どういたしまして」

胸元の赤いスカーフが風で翻った。
白いコンクリートが眩しい。

「……そうやって、少しずつ死んでいくのかな」

「何を馬鹿なことを言っているんだ」

ふん、とエマは心底呆れた様子で息を漏らした。

「死は全か無か、だ。そんなふうにじわじわとなど、少しずつなど、やって来てくれるものではないよ」

弁当に目を落としたまま彼女は言った。

意志の強そうな眉が、前髪の隙間から覗いている。

「おーい、三条」

扉が開いたかと思うと、ひょっこり顔を出した川下宗が声をかけてきた。
人懐こい大型犬のような男子だ。

「委員会、一時からだよ。のんびり食ってると遅れるよ」

「わかってるよ。もう行くから」

　川下は、じゃあ先行くわ、と言って去って行った。

　わたしたちが屋上にいることが、よくわかったものだと感心していると、エマが目の前でにんまりと音がしそうな笑顔になっていた。

「どうやら、川下はきみのことが好きなようだよ」

「なにを根拠に」

「根拠など、本人も知らない。第一、必要もない」

「わたしじゃなくて、エマのことが好きなんじゃない」

「それは些事だ」

　　それは、

　　全然、

　　些事なんかじゃ、

　　ないよ。

「いや、些事だね」

　確信しているような瞳。
　さして大きくはないが、長い睫毛に縁どられ、白目の白さが際立っている。

「さあ、由奈、きみの嫌いなブロッコリーを片づけてあげよう」

　返事を待たず、わたしの弁当箱からブロッコリーをさらうと、そのまま一口で食べてしまった。

「きみは早く委員会に行かなくちゃいけないからね」

「なんでわたしが」

「わたしは用があるんだよ」

「そんな」

　エマはさっさと弁当箱を仕舞うと、スカートを直しながら立ち上がった。

「わたしといる限り、きみのゲージはほとんど増えることはない。わたしのゲージも増えない」

「死にたくなるゲージ」

「そう、死にたくなるゲージだ」

　しかし。
　とエマは続ける。

「それじゃあ大人になれない」

　死にたくなるゲージを満たしていかねば、大人になれないのだよ。

死ぬこともできないし。

「用ってなに」

エマは優しいけれど、いつも勝手なのだ。

「まあ実は、用という程のことでもない」

エマはバッグを抱えたまま、端のフェンスに向かって歩き出した。
金網に近づきながら、左手でバッグをぽーんと、空に向けて放る。

「あ」

紺色のバッグは金網を越えて、下へ落ちる。
屋上のコンクリートではない。そのさらに下の地面に。
たしかこの下は舗装されていない、砂利だったはず。中の弁当箱は割れたかもしれない。

だがエマはそんなことには頓着していなかった。
歩みも止めずに金網に取り付いて、ガシャガシャと登って行く。

あっという間に、向こう側に降り立った。

狭い足場で、一度だけ振り向き、かすかに笑ったようだ。

「じゃあ」

と言い、彼女はさらに向こうへと歩き出す。

宙に足を踏み出した。

上履きのまま。

「あ、ああ」

わたしはやっと今、立ち上がる。

金網の向こうに、エマの姿はすでに見えない。

彼女はたぶん、天使じゃなかった。

羽根は持ってなかった。

わたしはそっと金網に手を掛ける。
わたしにここを登る勇気はない。

そっと下を覗くと、午後の日差しを受けて、乾いた砂利が白く眩しかった。

【end.】